

福岡大学病院外科切除肺における肺癌組織型の変遷

瀧崎 慎¹⁾ 加藤 文章²⁾³⁾ 林 博之¹⁾ 古賀 佳織¹⁾ 青木光希子²⁾
濱武 大輔³⁾ 川上 豪仁³⁾ 岩崎 昭憲³⁾ 鍋島 一樹¹⁾²⁾

1) 福岡大学病院病理部

2) 福岡大学医学部病理学教室

3) 福岡大学病院呼吸器乳腺内分泌小児外科

要旨：肺癌はがん部位別死亡のうち男性で第1位，女性でも第3位と高く，予後の悪い疾患である。近年，検診の普及や高解像度 CT をはじめとする検査機器および画像診断技術の向上により，2 cm 以下の小型肺癌の早期発見が増加してきている。今回我々は，当院における肺癌手術検体の再評価を行い，肺癌の組織型や最大径の変遷の傾向を検討した。対象は1990年から2009年までの20年間に当院呼吸器乳腺内分泌小児外科で手術を施行された肺切除検体のうち，腫瘍と診断された1708例とした。1990年から1999年および2000年から2009年の2群に大別して検討を行ったところ，腺癌の割合が48%から61%と増加がみられた。それに伴い扁平上皮癌は35%から20%と減少していたが，症例数の変化はみられなかった。小細胞癌，大細胞癌に関しては20年間で症例数の大きな変化は認めなかった。肺腺癌における腫瘍最大径に注目すると，前半10年に比べ，後半10年では2 cm 以下の小型肺癌の数が増加しており，特に1 cm 以下の腺癌が占める割合は4%から12%と著明な増加を認めた。また EGFR (epidermal growth factor receptor) の変異は，解析が行われた97例中38例 (39.6%) で認められた。近年では，肺癌は手術症例では腺癌が増加し，2 cm 以下の段階で切除される症例が増加している傾向にある。また EGFR をはじめとする分子標的治療も盛んに行われるようになっており，病理組織学的診断ではこれらの臨床背景に留意した診断を行う必要があると考えられる。

キーワード：肺癌，肺腺癌，小型肺癌，EGFR